

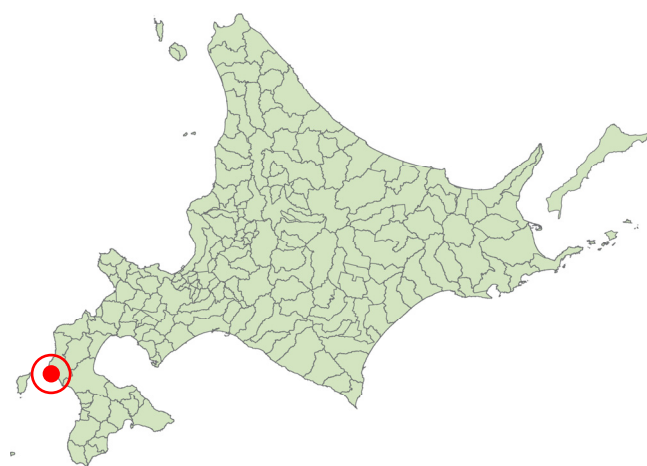
磯焼け海域のウニ資源管理と藻場の保全

貝取澗地区藻場保全活動組織

せたな町貝取澗地区について

北海道せたな町は北海道南部に位置し、地名の由来は、アイヌ語「セタルシュペナイ（犬の川）」が略されて「セタナイ（犬の沢）」となり、それが「セタナ」に転化したといわれている。地域漁業は、イカ漁、スケソウダラ漁を中心とした漁船漁業のほか、ウニ、アワビ、ナマコ等の採貝藻漁業が主体である。なお、せたな町内には、平成7年に檜山管内の8漁協が合併したひやま漁業協同組合がある。

本活動組織のある貝取澗地区は北海道南部日本海沿岸に位置しており、磯焼けにより大型海藻（ホソメコンブ、フシスジモク等）の藻場が消失していることから、藻場の適正管理や資源維持が地域の課題となっている。



貝取澗地区の位置

り、磯焼けにより大型海藻（ホソメコンブ、フシスジモク等）の藻場が消失していることから、藻場の適正管理や資源維持が地域の課題となっている。

貝取澗地区藻場保全活動組織について

せたな町内においては、藻場の保全活動組織が4組織ある。そのうち「貝取澗地区藻場保全活動組織」は、若手漁業者が中心となって貝取澗地区の藻場の保全活動を実施し、地域資源の維持に取り組んでいる。

- 設立：平成21年8月31日
- 体制：会員数5人(ひやま漁協大成支所の漁業者)

活動内容

潜水によるキタムラサキウニの密度管理 (H29実績14回)

スポアバックによるホソメコンブの母藻設置 (H29実績1回)

潜水による藻場観察 (海藻被度、ウニ個体数) (H29実績1回)



藻場の保全活動



ウニの密度管理



漁業者による潜水作業



除去したウニ (400kg/回)



除去したウニの移植



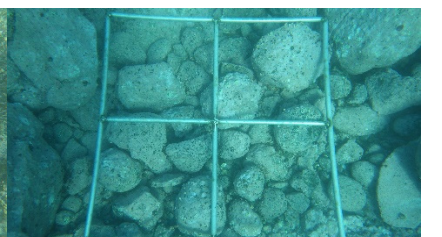
スポアバックの作成



スポアバックの設置



ウニ除去前の岩礁域



ウニ除去後 (被度0%)

藻場保全の効果について

本活動組織を構成する漁業者5人は若手漁業者であり、主に採貝藻漁業や潜水器漁業を営んでおり、自分たちの力で藻場の保全を行っている。

活動は、貝取澗地区の浅場(3ha)の海域で行っている。活動内容は、藻場の再生エリアでキタムラサキウニを除去し、海藻が多く繁茂する海域に放流する(除去量H28(計4.9t)、H29(計5.4t))。また、ウニを除去した再生エリアでは、スポアバック法(年100袋)によるホソメコンブ母藻の設置などを、自らで積極的に実施している。

しかし、貝取澗地区の活動範囲でのモニタリング調査によると、海藻被度は0%が続いており、ウニの密度管理や母藻設置による藻場回復の効果は現時点では認められていない。

当該地区のある北海道南部の日本海沿岸においては、磯焼けが顕著な地域が広範囲に存在しており、多くの活動組織が対策に苦慮している。本活動組織の会員数は5人と少ないものの、若手漁業者が少人数でも積極的に自ら潜水作業を行い、身の丈にあった藻場の再生の取組を継続的に実施している。未だ藻場の再生の兆しは見えていないが、若手を中心となって活躍する事例として、今後の成果に期待したい。